

《書評》

百木漠著『アーレントのマルクス——労働と全体主義』

(人文書院, 二〇一八年)

小 島 秀 信

働くということは、経済や経営を考えるにあたって不可欠となる研究対象の一つであろう。この働くということを最も根源的に考察した思想家の一人にユダヤ人女性哲学者のハンナ・アーレントがいるが、彼女の人気は近年とみに高まっている。二〇一三年公開の映画『ハンナ・アーレント』がミニシアター系としては異例のヒットとなり、上映した岩波ホールではそのパンフレットが七週間で五〇〇〇部売れたといい¹、矢野久美子『ハンナ・アーレント』(中公新書)が二〇一五年の新書大賞第三位を獲得するなど、難解な哲学者としては非常に注目されていると言ってよい。二〇一五年には「アーレント研究会」が設立され、順調に規模を拡大させており、二〇一八年には国際化に対応して「日本アーレント研究会」へと改称するなど、学界においてもますます存在感を大きくしている。

しかし、今なぜアーレントなのか。それに対しては様々な答えがありうるであろう。本書はその答えの一つを提供しているように思われるのであるが、その点については後で述べることにしたい。

これまでのアーレント研究では、公的に異なる意見をぶつけ合う「活動 (action)」に焦点が当てられることが多かったが、本書の特色は、持続性のあるものを製作する「仕事 (work)」や生命維持のための「労働 (labor)」にも焦点を当て、アーレントを読み直し、そのアクチュアリティを炙り出したところにある。そして、アーレントの労働観に大きな影響を与えたのがマルクスであり、マルクスを誤読することによって、アーレントは自らの全体主義批判の思想を形成していったのだと論じ、したがって、その誤読は、アーレントにとっての「生産的誤読」であったとする。

序章ではアーレントとマルクスの関係についての先行研究が整理されている。アーレントとマルクスの労働観の比較思想やアーレントのマルクス解釈の当否などについてはこれまで論じられてきたが、アーレントのマルクス批判と労働観が如何に彼女の全体主義論と結び付いていたのかについてはあまり論じられてこなかったがゆえに、その点を本書はテーマとすると述べる。

第一章では、アーレントのマルクス研究が『全体主義の起源』(初版一九五一年)と『人間の条件』(一九五八年)を繋ぐミッシングリンクの役割を果たしており、マルクスの思想を批判的に摂取していく中で、如何にしてアーレントが『人間の条件』の構想を練り上げていったのかが述べられる。アーレントはマルクス主義を全体主義の元凶の一つと考え、研究を始めたが、マル

1 2014年07月09日付朝日新聞東京朝刊

クスその人を全体主義の元凶とすることはなく、むしろ全体主義とマルクスを短絡的に結び付けることに否定的であった。ただし、マルクスは、「労働」を賛美したことによって、間接的に全体主義に寄与したと考えた。そして、アーレントは、このことが西欧政治思想史全体の問題にも繋がってゆくものであることに気付いていた。というのは、労働する動物と人間を捉えたマルクスは、人間を政治的動物・理性的動物と捉える西欧政治思想の伝統への反逆者であったからである。古典古代では、市民は「労働」に携わらず、政治や軍事などの公的な営みに従事すべきであるとされていたのに、マルクスは「労働」を人間にとっての本質的な営みであると捉え、「労働」の地位を高めた。それによって政治の領域が衰退し、政治的討議に参加する「活動」の領域も狭められ、全体主義が生まれる素地を整えたというのである。しかし、アーレントは、既にソクラテスの死を契機として「活動」の衰退は始まっていたと考える。他者との討議（「活動」）を重視したソクラテスが民主的決定により死刑に処されたことで、ポリスが公的領域で異なる意見を戦わせることに耐えきれなくなったのだと痛感したプラトンは、他者との討議を不要とする哲人王政治を提起した。哲人王は、自己の中での観想によって真理を見極め、真理に基づいて理想国家を製作することを目指した。つまり、西欧政治思想の伝統において、公的領域での討議たる「活動」は過去二度も劣位に置かれていたわけである。一度目はプラトン以降の観想優位思想において、そしてマルクスの労働優位思想において、それぞれ「活動」は軽視されてきたのである。しかし、公的領域での討議がなければ単一の意見に支配される全体主義が現象してしまう。したがって、アーレントが「活動」を復権させるために、マルクスと対決せざるをえなかったのは必定であった。

アーレントによれば、生命維持のための「労働」が優位になることによって、多くの問題が生みだされることになった。一つは、容易に生命過程の自然法則が絶対的真理と捉えられ、支配的なイデオロギーとされてしまったことである。例えば、ダーウィニズムの適者生存の法則が自然の理とされ、マルクスの階級闘争史観に結び付き、ひいては劣等人種や生きるのに値しない民族という恐ろしい発想へと繋がっていく。また、マルクスによれば、資本の価値増殖過程に労働力商品は不可欠なのであるが、アーレントの見立てでは、結局は、資本の価値増殖運動の結果、資本投下先獲得のための帝国主義、ひいてはその延長としての全体主義が生み出されたのであるから、資本主義と全体主義の原動力は「労働」であったと言える。さらに、ヒトラーの出現が生命維持への不安としての失業への恐怖とも結び付いていたのであるから、生命維持のための「労働」が支配的になることによって最終的には全体主義が生まれることになったと言える。そうした思想の根幹にあるのが、「労働」こそ人間の本质だと捉えたマルクスにあるとアーレントは判断したわけである。生命維持のための営みは動物もするので、人間の条件は「活動」や「仕事」にこそあるにも拘わらず、「労働」が優位に立つことによって、人間が動物化してしまうのである。

第二章では、アーレントの労働観をマルクスの労働観と比較し、その差異を考察している。ビクター・パレークが四〇年も前にマルクスの「労働 (Arbeit)」の中には、アーレントの「活動」、「仕事」、「労働」の三要素が入っていたのではないかと指摘しており、著者はそれを基本的には

受け入れている。したがって、マルクスは「労働」優位の思想を確立し、「活動」や「仕事」の地位を貶めたとアーレントが論難したのは誤りだということである。確かにマルクスの労働観には、生命維持という「労働」の側面もあれば、自らのイメージに従って合目的に耐久的なものを製作するという「仕事」の側面もあるし、自律的なアソシエーションを形成して他者とコミュニケーションしあうという意味では「活動」の側面も含まれている。むしろ著者は、その混濁性にこそ、近代の「労働のキメラ化」を言い当てたマルクスの天才があるとしている。近代においては、「労働」、「仕事」、「活動」の区別が曖昧になっているがゆえに、人間が「労働する動物」と化してしまい、全体主義が伸張したのだとアーレントは考え、「活動」の意義を救い出さねばと決意したのである。

第三章では、政治や余暇の観点からアーレントのマルクス誤読を検討している。マルクスは資本制下の「疎外された労働」を短縮して、それを克服した自由なるアソシエイトした労働を拡張させることを評価したのであって、労働全般の廃止を唱えていたわけではない。しかし、アーレントは、マルクスが「労働」を廃止することで「自由の王国」を実現させようとしていたと断じた。その点はアーレントの大きな誤読の一つであるが、彼女が問題としていたのは、「労働」からの解放が新たな疎外を生むということであった。つまり、「労働」以上の有意味性を知らぬ労働至上主義的近代社会においては、「労働」からの解放は人々を無意味さの中に突き落としてしまう。また、「労働」から解放された「自由の王国」では、エンゲルスが「事物の管理」へと政治が置き換えられると考えたように、人々は政治からも解放される。アーレントは人々の政治参加を全体主義の防波堤として不可欠だと考えていたので、このことを批判するが、著者は、マルクスの「自由の王国」においても「全国的生産の調整・統制のためには諸アソシエーション間の交渉・計画・協働が必要となるが、これはある意味では大変な『政治的活動』である」（一三一頁）と論じ、マルクスは政治からの自由を考えてはいなかったとする。しかし、アーレントは、政治が「事物の管理」と化すことは、徹底した官僚制化となり、全体主義に墮すると考えた。また、労働至上主義的近代社会においては、機械化による労働時間の縮減は、公的な政治参加へと結び付かず、私的領域における労働生産物の「消費」に向けられ、さらなる資本の自己増殖運動、そしてそのために不可欠となる「労働」の呼び水となる。つまり、労働至上主義的近代社会はまずもって大衆消費社会となるのである。そして、東独やユーゴスラヴィアの協同組合や自主管理制度を評価していたアーレントと、生産協同組合のアソシエーションを求めたマルクスとは交差している点もあるが、アーレントが「活動」を重視したのに対して、マルクスは労働・生産を軸としてアソシエーションを構想した点が異なるという。

第四章は、アーレントがなぜ「社会的なもの」を否定的に捉え、その起源をなぜ「自然なもの」に見出していたのかについて論じている。「社会的なもの」とは、家政という私的領域が国家レベルの経済的問題へと拡大されたものである。「社会的なもの」は画一主義を特徴とし、経済活動の領域なので、食べていくなどの自然における生命過程とも結び付いている。したがって、生命維持のための「労働」とも結び付いているので、近代における「労働」の公的領域への浸食と「社会的なもの」の伸張というのはパラレルの関係にある。アーレントにおける自然と人

為ないしは政治との区別はアリストテレスやハイデガーの影響が見られると筆者は言うが、この自然の生命過程が勝利するとき、それは人間の動物化を意味することになると指摘する。むしろ、人間が人間たるゆえんは、生物のレベルである生命過程、自然性を乗り越えたところにあるはずである。しかし、人間の至上の目的が動物的な生存や、そのための「労働」に置かれてしまうと、生存すべき人種と淘汰されるべき人種というようなナチズムへと容易に結び付くことになってしまう。もちろん、生命過程は人間にとって不可欠であるが、それを目的とする「労働」のみならず、「仕事」や「活動」とのバランスが重要なのである。

第五章はアーレントの帝国主義論を「余計なもの」の処理という視点から読み解いている。同質性を前提とする国民国家と、膨張しようとする資本主義のアマルガムが帝国主義であり、それにヨーロッパにおける社会的居場所を失ったモップが乗じて、一獲千金を狙って海外進出していったのが、一九世紀末からの国際情勢であった。過剰資本とモップたち過剰労働力が国内では処理されえず、それらが同盟して欲望のおもむくままに海外進出していったのが海外帝国主義である。ところが、歴史的同質性を前提にした国民国家の形成が遅れた東中欧諸国では、同じ血・魂というイデオロギーによる同質性が創り上げられ、当然、はじめから歴史性や土着性を有していない同質性概念であったがゆえに、いくらでも同一の民族という意識を広げることができた。「余計なもの」を海外へと排出した海外帝国主義とは異なり、東中欧諸国は、「余計なもの」を同一の民族ではないと排斥することによって処理しようとした。民族の同質性・純粋性を保つために排斥すべき「余計なもの」とされたのが、端的に述べれば、ユダヤ人であった。著者によれば、「余計なもの」の発生は、マルクスの本源的蓄積論で論じられた土地収用とプロレタリア化に因るのであり、そこにおいて、資本主義と労働中心主義と帝国主義、全体主義が結び付いている。「経済成長が鈍化し、雇用の縮小・流動化が進み、『余剰＝余計』な資本や投資先」(二四三頁)が問題となる現代においては、こうした点はアクチュアルな問題提起になるという。

第六章は、「労働」が政治的領域に侵入することを拒否したアーレントが、当初は労働者の政治参加に否定的だったが、ハンガリー革命で労働者の政治参加を評価するようになり、労働する動物と労働者を区別するようになったのだとする。また、アメリカ革命での憲法制定を永続的なものを製作する「仕事」だとし、「活動」と、そのための永続的な場(「世界」)をつくる「仕事」を相補的に捉えていたことを明らかにしている。

終章では「活動」中心に論じられてきたアーレントであるが、「労働」や「仕事」も重視していたのであり、そのバランスが必要だと考えていたのだということでもまとめている。

旧来、アーレントにおいては「活動」の側面ばかりが注目されてきたが、本書は「労働」や「仕事」にも着目し、そこにマルクスの影響を見たという点で興味深い研究である。異なる意見を戦わせる「活動」は、没个性的で画一的な全体主義を否定する積極的な原理であったから、アーレント研究史において全体主義の元凶としての「労働」よりも「活動」が重視されてきたのは当然と言えば当然である。実際、「労働」の分析は全体主義の原因を探ることにはなるが、全体主義を乗り越える原理はそこから出てこない。しかし、本書を読むと、その「労働」の分析が今日の社会を読み解く視角をも提供してくれることに気付かされる。マルクスの指摘したよう

に、資本制経済の存立基盤の一つには労働力の商品化があり、そのためには第一次エンクロージャー運動などによって土地から切り離された大量の根無し草的な労働者の存在が不可欠であった。つまり、資本制は絶えず人々を「余計なもの」として追いやり、それを原動力として摂取して増殖してゆかねばならないのである。もちろん、資本は有機的構成の高度化などを通じて相対的過剰人口を生み出し、常に自らの栄養源である「余計なもの」を生み出していくのだが、アーレントの観点に立てば、帝国主義も全体主義もこの「余計なもの」を如何に処理するかという目的の点では同根なのであった。

こうしたことは過去のことであり我々は等閑視できるだろうか？ トランプ米大統領が行っている移民排斥は、まさしく移民を「余計なもの」として排除することによってそれを処理しようとするものであったし、安倍政権による外国人労働者拡充政策は、少子化によって「余計なもの」が激減してきたがゆえに、外国人労働者の導入拡大によって積極的に「余計なもの」を作り出し、資本の需要に供することでそれを処理しようとしているにすぎない²。資本は常に栄養源である「余計なもの」を生み出すよう血眼になって努力しているし、資本に規定される政治機構はそれを処理すべく権力を行使するのであるが、この近代の帝国主義や全体主義を生み出した“循環構造”と言うべきものの帰結が如何に非人間的なものであったのか、ということについてアーレントの全体主義分析から今日学ぶ点は大きいだろう。アーレントの全体主義批判を今読み解く意義があるとすれば、まさしく全体主義の嵐渦巻く「暗い時代」が、陰伏的にはあるが、少しずつ現代に近づきつつあるということに気付かされることにある。

その点で非常に意義深い本書であるが、大きく一点だけ気になった点を挙げておきたい。マルクスとアーレントの労働思想の比較が行われているが、マルクスに関しては基本的に既存の解釈に依拠していると言ってよい。また、マルクスの「労働」はアーレントにおける「労働」「仕事」「活動」の全てを包含しており、アーレントがマルクスを「労働」のみを賛美したと批判するのは誤りだというパレークやホルマンらの解釈も著者は完全に受容している。むしろ、それゆえにマルクスの労働観は「労働・仕事・活動が一体化する近代の特徴を的確に反映している」（一二頁）のであり、「活動」などの領域に「労働」が侵入した近代の全体主義的な状況をマルクスはしっかりと把握していたのだと解している。マルクスがまず自然の生命過程として「労働」を捉えていたことはアーレントも認める通り確かであろう。『資本論』第一巻第五章にあるように、マルクスにとって、「労働」は人間と自然の間の一過程であり、自らの生活のために自然に働きかけ、自らもそれによって変化していくような過程である。この生命過程としての側面の他に、マルクスは、人間が動物と異なる点として生産の目標物をイメージできる点を挙げ、ヘーゲルに倣って、「労働」を合目的かつ内面世界の対象化の過程としても捉えており、マルクスの労働観にはアーレントの「仕事」の要素も含まれていたということも確かではあろう。

しかし、マルクスの労働観における「活動」の要素とは何であろうか。確かにマルクスは理想的な社会においては労働者たちがアソシエイトし、合理的かつ共同的な統御の下に経済活動を行

2 したがって、経済成長の鈍化はともかくとして、雇用縮小による「余計なもの」の創出という著者の現代社会分析は、現在では少し実情にそぐわない面があるように思われる。

うとしていた。マルクスは生産協同組合の有機的連帯を想定していたようであるが、上で引用したように、「このような全国的生産の調整・統制のためには諸アソシエーション間の交渉・計画・協働が必要となるが、これはある意味では大変な『政治的活動』である」(一三一頁)と述べ、著者は、まさしくマルクスの理想社会の「労働」には政治的な「活動」の要素が入っていたとする。マルクスの中に後世のアーレントが唱えた「活動」の要素があるかどうかはマルクス研究にとっては詮無きことではあるが、コミュニケーションや協働関係があるということがアーレントの「活動」を意味するものなのかどうかということは、アーレント研究にとっては極めて重要である。

私見では、マルクスのこの意味でのコミュニケーションには意見の差異や対立は基本的には想定されていないが、アーレントの「活動」には明確に意見の差異性——いわゆる「複数性 (plurality)」——がむしろ全体主義批判としての「活動」の基幹的要素として重視されていたと思われる。それを踏まえれば、マルクスの理想社会における「労働」にアーレントの「活動」が——特に基幹的な意味で——含まれていたとするのは無理があるのではなからうか。マルクスが来るべき世界においては根幹における公的対立は解消されていると考えていたということに関しては、本書でも引照されている『フランスにおける内乱』において、「協同組合の連合体が一つの共同計画にもとづいて全国の生産を調整し³」、資本制の無政府性と周期的痙攣を終わらせるのだと述べる時、「一つの共同計画」というある種の公的合意が全国的生産調整の前提として想定されていたことを鑑みればよい。政治的対立の根源である階級対立が終焉した未来社会では政治的な意見対立は止揚されており、その意味ではアーレントが透見したように、経済問題の同一性に政治的な差異性が解消されているのである。言うまでもなく、著者の述べるように、あくまで生産調整がマルクスの理想社会における《政治》であるとするならばの話であるが、マルクスの理想社会においては政治的世界における対立や差異性は大枠では想定されていなかったと言える。ただ、当然のことではあるが、『ドイツ・イデオロギー』では食後には批判すると述べられていたように、このことと人々の考え方の社会的な差異性がなくなるということとは全く別のことであり、マルクスもそんなことは一切述べていない。しかし、マルクスが企図した政治的対立の止揚——アーレントが絶対に認められなかった点——は、彼にとって青年期の『ヘーゲル国法論批判』や『ユダヤ人問題に寄せて』で、幻想の共同態たる政治的国家を、差異と闘争の領域である市民社会へと止揚しようとしたとき以来の一大テーマであった⁴。

逆に言えば、マルクスは政治の問題を経済の問題に解消させることによって、政治的対立の止揚、つまりは人類の最終的な政治的和解を企図していたのだと言えよう。しかし、ナチズムによる全体主義的同一化の恐怖を体験していたアーレントは、差異、複数性、卓越といった反同一化の契機を過度なまでに重視していた。したがって、アーレントに違和感を抱くポイントでもある

3 マルクス「フランスにおける内乱」(大内・細川監訳『マルクス・エンゲルス全集』大月書店、一九六六年)三一九-二〇頁

4 初期マルクスの政治否定論については、拙稿「マルクスにおける政治否定のロジック——初期マルクス法・政治思想の新地平」(『政治思想研究』第四号、二〇〇四年)を参照。

のだが、アーレントの討議には合意という契機が入りにくい。もちろん、それゆえにハーバーマスの合意への批判を回避できたわけであるが、差異や卓越の示し合いがアゴーンであるとするならば、結局はポストモダンのな、通俗的意味での《神々の闘争》に堕してしまうだけであろう。アーレントもおそらく「共通感覚（common sense）」の問題などその点について苦悩しながらも一定程度自覚的であったと思われるが、⁵その意味では、真に難しいのは、対立の廃棄＝同一化でも複数性の絶対的擁護でもなく、エドモンド・バークの述べたような「多様性の中の統一」を如何にして実現させるべきなのかということであると言えるのかもしれない。

もちろん、本書はそうした今日の政治社会問題を深く考察するための契機となるような力作論考であることは変わらないのであり、本書を刺激剤としてアーレント研究のみならず、現代社会の思想的・哲学的研究も盛んになることを期待したい。

5 このアーレントにおける両義性については、川崎修『ハンナ・アレントと現代思想／アレント論集Ⅱ』（岩波書店、二〇一〇年）の特に第四章を参照されたい。